



# NAKED EYES HIROSHI KAWATA

PART2-Talk live battle6

INTERVIEW:KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH:TOSCIO TOMITA



# たった一度の人生だから、芸商人の魂に生きる。

京都御所北方の相国寺北門前方面に向かう。生い茂る木々の間に重厚な瓦葺きの大きな屋根が前方に見える。眼前に背丈を遙かに越える門柱が飛び込んで来ている。その門を一步入ると左手に「禅門高等専門学校跡地」と記した石碑が立っている。劇団の稽古場と聞いていたが、寺小屋、否、維新の志士を育てた私塾の様に思える。ここが「おきた塾」の本拠である。

1951年故長田純によつて創設され「誰もが無条件で、楽しく清潔な感動を通して、その余韻の中から何かを考えさせてくれる演劇」を目指した。ある時期には稽古が非常に厳しいことで「竹刀を持って追い回される」との噂だが、洛中や演劇界の世俗話として飛び交い有名にもなった。1975年演劇塾長田学舎の理念は江戸時代の芸商人の生活を再現する「町かどの藝能」として集大成された。

1959年福井県生まれの河田は高校卒業の1977年に故長田純に信望し入団した。河田が俳優として初めて預かった命は堂芸商人「弥七」である。アルパイトをしながら研究生としての修行を終、正式劇団員となり劇団活動の主軸の一人として活躍している。昨年入塾20年目を迎えて、芸商人の精神とおきた塾の神髄が何たるかを、己が使命が見えてきたと語る。

1975年長田純の作「演出により生まれた「町かどの藝能」には、脚本があるわけではない。江戸時代の芸商人が生きながら食わんが為に研いでいた大道芸、唄売り声の技だけを追いかけるものでもない。芸商人の生活に踏み込み、そのものを体感し、商人魂に目覚めるべく心を体で触れてゆくことが稽古だと語る。行燈の灯りを筆を執り、素足に草鞋はきで山を歩く、修行しながらの生活体験は一つの商品を手を売らなげの商人の客を迎える笑顔の神髄を教え、売れた時の商人の頭を下げる角度に現れる。「ありがとうさん」にこさいます。お氣をつけて。」威勢良いおらかな挨拶は心から湧き出すと聞いた。

河田は家族旅行をしたことがない。妻に月休み二日を約したが一回も守れていない。年に一度の夏休みの三日間は子供と一緒に学童キャンプに参加している。このときはじめて現代の親となり、こんな楽しみもあるんだと気づいている。彼はこの休みに深い感謝を抱き弥七とオーバードラップしていることだろう。

■「技を演じる」と書いて演技ですが、芸商人の稽古はハイチャルリアリテイです。

ほんとうに江戸時代に生きようとしています。その状況を創り出し演じる人物の魂と一体化する事は俳優の使命なんです。その魂を自分の心と身体を使って再現するのが仕事ですから。どの様にやれば説得力が出るだろうかとか考えるのではなく、その空間を作る事によって生まれ出てくるものです。江戸時代の京の都で生き活きと生きていた芸商人「弥七」を河田の心と身体を使って現代に再現するのです。演技をテクニクとしてマニュアル通りマスターしても学芸会のスター止まりです。上手であつても決して感動を起こせない。稽古場では魂に生きよう、命に生きようとする団員の心がぶつかり合つてますから、とても素敵な時間です。

■弥七や団員はスターになつてお金儲けを考えてないんですか。

そういう人はあまりここには来ないんですよ。お金儲けの問題は苦手だけど劇団が運営できる程度でいい。演劇を通じて心を正す。演劇で心に火を点けなければ俳優として働いてゆけませんよ。未熟であつても信じて打ち込んでこそ感動が生まれるのだと確信しています。そして感動を体験し、その感動の輪を演劇を通じて観客に伝達しています。ほんとうに心豊かになりますね。殺伐とした現代に日本人の心を取り戻すことは決して自己満足じゃない。

■登校拒否世代や無感動世代も閉塞した環境のせいで元気がない。人間の本质は変わつてないと思う。誰もか持ち合わせる水脈。筋脈は揺り起こせないものか。

若者は突破口を求めている。自分の可能性を信じてくれている人を求めている。どんな人間でも何か可能性を持っているが、認めてくれない発見できないジレンマを抱えている。心が潤うことを感じたいそのエネルギーは強大である。心に火を点けるには私塾や芸術しかないだろう。そして良き指導者に出会うことが重要だ。

詰まらず指導者は唯喋る。少ししな指導者は理解しようとする。優れた指導者はやつてみせる。最高の指導者はやる気にさせる。長田先生に「人を指揮するのは階級であるが、人の心を掌握するのは人格である。」とよく論じられました。

■鎖国日本で生きてきた弥七の目で現代をみると、正直にどう感じますか。

まず、勿体ないと思います。消費文化に留まらんと、一回しかない人生をもっと豊かに幸せに生きていけるのに簡単に時間を過してしまふやう。

次に、感謝の気持ちがないのは不幸だと思います。有形無形にいはいモノを費つてても、その喜び嬉しい気持ちがない訳やさかい。真夏の陽射しの中の行商での施茶所のおふ一杯、日陰の涼しさをくれる木立。ほんまに有り難いと思います。そして、足を使わんとあきまへん。「満足」とは「足を満たす」と書きます。商人なる商い品を自分の足で探してきて、運び、自分の足で売つて歩くのが基本です。足をよう満たせば満たすほど買つて戴いたときの満足は大きいです。足を使ふから満足な健康も戴けるんです。

一つ聞いて十を悟るは死語化している。一つ聞いても半分しか理解出来ない行えないのが顕著な点である。嘆かわしい事だが事実である。あらゆるマニュアルが行動を支配し心を置き去りに疾走した時代の謂である。おきた塾の河田は、弥七は何を講釈するともなく大道芸にいそしみ芸商人を演じている。演劇の楽しみ方は自由である。何をもち帰るも観客次第である。「おっちゃんケン玉うまい。僕もやるで」という少年は、この気持ちを忘れず成人して欲しい。その内に行間空間から欲求物を見出し時代を越えてゆくだろう。ここは戦後堆積した心の垢を洗い流してくれる。弥七は誠実な奴だった。

(敬称略) 文・五所光一郎  
写真・富田都市夫

# 志洋田河